

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-1 1

惚れ込んだ男と嗜好が同じだったことが、真紀は無性に嬉しくて口吻を洩らした（こうふんをもらした）。

「飲んで帰ってサラサラやるのも、迎え酒がわりにサラサラやるのも悦楽だと口癖のように言っていた兄ですから、真紀さんに隠していたのは、明かしたら最後、自信が持てなかったんですよ」

「きっと、言いたくてむずむずしていたんですね。そう思うと、あの時も……目に浮かんできます」

二人の女は言い合い、泣き笑いをする。

「失礼します！」

知らず知らず女ざかりの二人の語らいに引き込まれていた女達は、漸く人心が付いたように食膳を片づけると、てんでに挨拶をして食堂を出て行った。

「これから、みんな踊りに参加するんです。私たちも着替えましょうか」

「私は見物するだけよ」

「せっかくですから、この地区のオリジナル着物を着てください。兄も喜ぶと思います」

「地区ごとにデザインが違うの？」

「元は同じだったんです。数年ほど前から曲調も振付も地区ごとに変化して、今では競い合っていますけれど、それぞれに見どころ聞きどころがあります。客間に一式用意してありますから、どうぞ」

「酔いがまわってきたのかしら？」

おもむろに立ち上がった真紀は、目頭を押さえてへたり込んだ。

「お疲れになったのでしょうか。お風呂で汗を流してからにしませんか」

「すみません。そうさせていただきます」

張りつめていた心の底を、酒が対流したせいか、微酔で立ちくらみした真紀は、自嘲的に笑った。

真紀は湯化粧をし終わると、用意されていた着物を身につけて、風呂からあがってくる麻里子を待っていた。

「お似合いです！どうしましょう～並んで歩けないわ」

湯上りに頬を桃色に染めた麻里子は、口をあんぐりと開けたまま声高に言った。

表に出ると、地方（じかた）の奏でる舞曲が程近くから風に乗って聞えてくる。

「まだ、姨捨観光会館広場で輪踊りをしているところです」

麻里子はそう言って、月光に照らされた顔を傾げた。